

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第4号 2007/07/31 発行



桃米絵画クラスのお婆さんたち、創作の中に達成感を味わう

桃米老人絵画クラス

文／顔新珠(新故郷文教基金会・執行長)

「プー、プー」バイクの音が近づいてくる、錦英婆さんを時間通りに迎えにくる石文江爺さんだ。やがて桃米老人絵画クラスの時報が――。

「えっ、もう11時だわ、終わらなきゃ！」

命の軌跡を描き出す

2004年、埔里鎮桃米村のお年寄り達に創作の興味や能力を呼び起こそうと、私たちは老人絵画クラスを開講した。

「年寄りの習性は直らんよ、皆お腹一杯食べて病気になるのを待っているだけさ。」

「鋤を持つなら良いが、絵筆を持ってどうするの！」

「画を書くなんて女のやること。」

厳しい見方の中、私たちのふるさと老人絵画クラスは「半信半疑」といった状況だったが、これまで5人のお婆さんたちによって運営されてきた。初め筆を持つのも怖がったお婆さんたちもやがて大胆に描き始め、全く自信がなかったのが今では描くのを楽しむまでになっている。2004年末、私たちがお婆さんたちの戶外絵画展を開催したところ、それを見た社区の人たちはその素朴な画風に驚き感じ入った。

絵画クラスも3年目を迎え、定期クラスは5名増えて10名になった。若い頃の仕事の無理で両足が不便な錦英婆さんが絵画クラスに入ったとき、やはり爺さんはぶつぶつ言ったものだ。「絵を描いて何になる、そんなに夢中になったって！」

「お前さんら男が酒を飲むのも何になる？なぜそんなにお酒好きなの！」婆さんも負けてない。

このお年寄り夫婦は互いに助け合って貧しい日々を過ごしてきたが、元の住まいだった土角厝(日干し煉瓦作りの農村の伝統家屋)が921地震で倒れてしまった。お婆さんは絵画クラスに参加した後、昔の生活が絵の題材になった。小さいときから彼女に優しくしてくれた義理の姉さんそしてご主人などがお婆さんの絵の主演である。そしていつも身をもって婆さんを助け、時間通りの送り迎えをするのが爺さんだ。婆さんの絵がまだ一段落してないときは、静かに傍らに座り、結婚して60年連れ添った妻が一心に創作している姿を、口元に微笑みを浮かべながら見守っている。

結婚、伐採、耕作など…これらすべてお婆さんの画材になる。彼女の画風に生命の軌跡が現れるのは、絵を描くことが彼女にとって苦渋の歳月の一つの表出だからだろう。

絵を描くことで見出す希望

「おばあさん、あなたの描く桜ほんとに綺麗ね！」88歳の張選格さんは、皆から褒められていつも優しくほほえんでいる。小さいとき家庭は貧しく、10歳になっても学校へ行けなかった。ある日田でガチョウの飼育をしていたとき、見かけた日本の教師が父母を説得して初めて学校に入った。学校では才能を現し、絵画の選手にまで選ばれたが、家が貧しいため進学できず、創作の路は断念した。

1935年、埔里に初めて手工紙工場ができたとき、彼女は応募し、最初の8名の女工員の一人になった。器用な彼女は工場を代表して展覧会に参加、篩紙で第2位を獲得したほどだ。

25歳のとき、母親の差配で後妻に嫁ぐことになって、いきなり4



生涯学習の場である絵画クラスは、交流の場でもある。



鍾錦英婆あさんは、働き子育てしてきた日々を描き留めることが重要な画題だ。



桃米のおばあさん達、絵筆で絵を描くのは得がたい歲月。

人の子の継母となり、家の切り盛りや子どもの世話が彼女の生活のすべてになった。85歳のとき、娘さんの励ましで絵画クラスに入り、6、70年忘れていた画筆を取り出し、毎回の授業で真剣に学習している様子は、若いときの欠落を補おうとしているかのようだ。そして、彼女の優雅な画風は誰もが賛嘆する。1年ほど前、お婆さんはけつまずいて頭に怪我をして病院に入院した。3ヶ月ほど臥せったあと、体の状況もよくなり、再び絵を描きに来ている。最初こそ痛み上がりで色や形がはっきりしなかったが、今では次第に以前の精彩な水準に回復しつつある。絵を描くことは一種の回復治療の方法でもあるのだ。

朗らかな桂鶯婆さん、その画風は雄渾にして大胆、「いつもどう描こうかと考えているから、年寄りの痴呆症になる心配ないよ」と笑って言う。

また、一生農作業をしてきた黄腰婆さん、もともと読み書きできない彼女だが、作品に署名をするため、努力して自分の名前を書くことを学んだ。

このお婆さんたちは、絵を描くという世界に入って自分の位置を見出したのはもちろん、高齢の農村女性はただ家において何もしないという一般の考え方を打ち破り、地域の活力や多様な持ち味を人々に示してくれている。

夏休みがくると、桃米の絵画クラスは一段落となる。気候が爽やかになる秋を待って、新しい絵画クラスが改めて開講する。その時には又、お婆さんたちが画筆をふるって、重厚で輝かしい命を描き出す姿が見られるでしょう。



88歳の張選格ばあさんは絵画クラスの最年長、絵を描くことで、小さいとき貧しくて諦めた芸術の夢を探す



張選格ばあさんの作品。優雅な細やかさにあふれる。

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第4号 2007/7/31 発行

もう一つの公園・海運双子池公園で

野田北部な日常



震災後、海運町3丁目に整備された海運双子池公園

台湾の皆さんこんにちは。梅雨による大雨被害、台風、そして新潟県を襲った大きな地震と暗い話題が続いていますが、野田北部では7月も後半に入り、毎年恒例ののだ北夏まつりの準備が始まりました。神戸はまだ梅雨真最中ですが、夏まつりとともにいよいよ夏本番が近づいてきました。



さて現在、野田北部には阪神大震災時の火災を止めたとして有名な大国公園とは別に、震災後の震災復興土地区画整理事業によってできた海運双子池公園があります。この海運双子池公園は整備をするにあたり、住民参加のワークショップも開催されました。名前はかつて野田北部にあった双子池に由来します。双子池は大正時代の耕地整理で埋め立てられ、現在の本庄町2、3丁目、海運町2、3丁目とその位置にあたります。



この大国公園と海運双子池公園は地域住民によって管理されており、清掃はもとより花壇の手入れ、雑草の除去、遊具の点検なども併せて行っています。

海運双子池公園では、春先にシダレザクラやハナミズキ、アーモンドが可愛らし



明治18年頃の双子池。点のような人物の姿から池の大きさが偲ばれる。出典『西部(野田地区)耕地整理後の町並』

い花を咲かし、また NPO 法人リーフグリーンが野点の会などで使用する四阿が、日本庭園のような雰囲気をつくり出している公園となっています。ところが、この時期になると急成長した雑草が一面を覆い尽くし、その隙間には犬や猫の糞が散乱するなど見苦しい状態となってしまいます。



そこで毎年、野田北部まちづくり協議会浅山会長を筆頭に有志が募り、草刈りを行います。今年は7月19日に行いました。当日は梅雨の中休みで晴天となり、気温は 28℃。野田北部の事務所には電動の草刈り機やカマ、剪定ばさみなど道具一式が揃っており、400 m²程の広さを一気に刈っていきます。私も電動の草刈り機で手伝いましたが、思った以上に腰に負担がかかる・・・草刈り機でできない部分は手作業で仕上げていきますが、きっと皆さんも腰が痛かったはず。しかし作業をしだすととことんまでやらないと気が済まないのが野田北部。最終的には 30 個を越えるゴミ袋の山ができていました。



大国公園で開催された、公園整備のワークショップの様子

野田北部では、「地域でできることは地域でやろう」というスタンスで様々な取り組みを続けています。その根底の部分を支えているのは、今回の草刈りに参加して下さった有志の方々であり、声がかかれば一緒に汗を流す住民さんです。またその方々も、例え役職がなくても自分たちが活躍できる「場」があることは、うれしいことではないでしょうか。

草刈りが終わって、事務所で冷たいお茶を飲みながら、汗を拭っているみなさんの顔は、満足感に満ちあふれていました。少しの疲労感とともに。

文 野田北ふるさとネット 寺沢正敏



住民たちによる草刈の様子

発行／たかとりペーパードーム台湾再生計画推進委員会

日本事務局 たかとりコミュニティセンター

E-mail : office@tcc117.org

台湾事務局 新故郷文教基金会

E-mail : land@homeland.org.tw